

### 看護用品の解説

綿の塊をちぎって作った手作り綿球の端は、しっぽのようになっていた。

### 看護用品にまつわるエピソード

1961（昭和 36）年頃、綿球は中央材料室の看護婦が作っていた。綿の塊から綿を小さくちぎって綿球を作っていた。利き手でない方の親指と人指し指に小さくちぎった綿を重ね、ある程度の厚みになったところで指からはみ出た部分の綿を利き手の親指と人指し指でくるっとひねって綿球を作った。看護婦の指に握られていた部分は綿球のしっぽのように見えた。消毒液に浸った綿球を取り出す時には、しっぽの部分が適度な硬さになっていて鑷子で挟んで取り出すのにつかみやすかった。

その後、看護婦長として病棟を巡回しているときガーゼ交換をしていた看護婦に介助を求められ、消毒綿球を渡そうと綿球のしっぽを探したが既製品の綿球にはしっぽが付いていなかった。

（島尻愛子，2004）

### 解説

看護婦が作った手作り綿球のできあがり具合は、既製品の綿球と比べてどうだったのだろうか。そこで、手作り綿球から既製品に移行する時期に両方の綿球を使ったことのある看護婦に、そのことについてお話を伺った。既製品の綿球は、硬さが均一であったのに対し、上手な人が作った手作り綿球は、弾力性があり崩れにくかった。手作り綿球は弾力性があるために皮膚に沿うことから、消毒時の使い勝手が良かったということである。

（名城一枝，2004）